

氏名	永田 康祐
ヨミガナ	カミタ コウスケ
学位の種類	博士（映像）
学位記番号	博映第23号
学位授与年月日	令和5年9月30日
学位論文等題目	〈論文〉 写真を生み出す装置—技術社会的ネットワークとしての写真のプログラムについて—

論文等審査委員

主査	東京藝術大学	教授	（映像研究科）	桐山孝司
副査	東京藝術大学	教授	（映像研究科）	桂英史
副査	東京藝術大学	准教授	（映像研究科）	服部浩之
副査	多摩美術大学	教授	（美術学部情報デザイン学科）	久保田晃弘

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、デジタル化とそれに伴う撮影や加工の自動処理が一般化していくなかでますます多形化・分散化している写真について、それがいかなる装置によって生み出されているか検証し、メディアのもちうる性質を、特に写真制作者の視点から分析するための手立てを探し出すことである。様々な社会的技術的形態をとる写真の可塑性を分析するため、本論文は、写真を物理的対象としてのカメラやプリントではなく、様々な技術的対象や社会集団などの組織体からなるネットワークとして捉え、ソフトウェアという観点から論じることを提案する。本論文では、ジェフリー・バッチェンによる写真史の議論の読解を通じて写真の可変的な性質を導出し、その具体的な働きについて、ブリュノ・ラトゥールによるイノベーション研究やレフ・モノヴィッチによるソフトウェア研究を参照しながら明らかにする。写真のデジタル化とウェブサービスへの写真の利用・受容の浸透は、写真研究を美学芸術学領域だけでなく、メディア論や社会学、人類学などの諸領域へと開くと同時に、研究の個別具体化や専門分化ももたらしている。本研究は、こうした諸領域の研究を接続することで、抽象的な理論と個別の事例分析を繋ぎ、写実実践のための理論的枠組みを提示する。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、撮影から流通までのあらゆるプロセスがデジタル化された現在の写真をとりまく状況で、そして監視カメラのように自動化が進んだ現代の社会において、写真とはなにかという問題を制作者の立場から論じている。

第1章「写真的なもの」では、バッチェンの『写真のアルケオロジー』を議論の出発点として分析している。バッチェンの理論は写真の誕生以前から現在に至るまでの「写真的なもの」の動的で多形的な性質に関する議論と、そうした動的で多形的な「写真的なもの」からいかにして写真が生み出されたのかについての議論から成り立つが、著者はデリダによる散種の議論を参照しつつ、この写真的なものが仮に物理的な対象としての写真がなくなったとしても存在し続け得る、開放性をもったものとして捉えている。

第2章「写真装置とプログラム」では、現代社会において様々な技術的対象や社会集団による相互に可塑的で動的な関係によって生み出されている状況を社会技術的なネットワークとしての写真と呼び、写真装置とプログラムという概念を用いて分析している。

第3章「デジタル写真」では、第2章で検証した写真の社会技術的なネットワークが、デジタル化によっていかなる変化を被っているのかについて、モノヴィッチのソフトウェア研究を補助線に検証している。

第4章「器具一式性」では、写真装置が単一の機械ではなく様々な器具や組織のネットワークであるということをアーティストのワリード・ベシュティの作品分析を通じて確認している。主に写真の社会技術的なネットワークがデジタル化以前においても複雑で動的かつ多形的な構造を持ちえていたことをベシュティの作品の制作プロセスの分析から考察している。

第5章「ソフトウェア」では、写真の原理の変化について写真家のルーカス・ブレイロックらの作品を通じて検証している。写真のデジタル化によって、作品がいかなる視覚的効果を獲得し、アーティストがどのような社会的・政治的実践をそこで行おうのかについて、モノヴィッチや美術批評家のgnckによるソフトウェア研究やデジタル画像研究をもとに検討している。

第6章「ハイブリッド」では、ネットワーク化され自動化された写真行為の政治性について、ヴォルフガング・シュテーレの《Untitled》や、哲学者のアレグザンダー・ギャロウェイのプロトコルに関する理論をもとに論じている。

最終審査では、現在急速に発展しつつあるAI技術の影響についての議論がありつつも、写真を中心としたメディア論として現時点で論述可能な内容をまとめたことが評価され、本論文の審査を合格とした。